

20 慢性膀胱炎に対して漢方薬が奏効した

1 例

神戸大学大学院医学研究科 腎泌尿器科学分野

重村 克巳、中野 雄造、藤澤 正人

近年薬剤耐性菌の増加に伴い、特に第三世代セファロスポリン系薬を中心に経口抗菌薬の不適切使用を見直す動きがある。特に症状を認めない、慢性細菌尿、慢性膿尿を認める患者に対しての抗菌薬処方是一般的には推奨されていない。しかしながら患者の「尿が濁っているので抗菌薬が欲しい」の訴えに対して経口抗菌薬が処方されている例は少なからず認められていると思われる。今回有症状の慢性膀胱炎患者に対して補中益気湯が効果を示した1例を報告する。

症例は80歳男性。尿路基礎疾患は前立腺肥大症。既往歴に腰部脊柱管狭窄症、狭心症、胆のう摘除後、糖尿病があった。ここ数年来の慢性膀胱炎のため当科紹介となった。ここ半年間でファロペネム、ミノサイクリン、レボフロキサシン、ホスホマイシン、ST合剤などが処方されるも、抗菌薬を服用中は軽快するが、その後の頻尿、下腹部不快感を認める。尿培養検査ではExtended spectrum beta-lactamase (ESBL) 産生のEscherichia coliを認めた。薬剤感受性としては経口内服薬ではキノロンやセファリスポリン系には耐性を示し、ミノサイクリン、アモキシシリン/クラブラン酸配合剤にのみ感受性を有していた。また前医より猪苓湯を処方されていたが、効果は乏しく、また疲労感も伴うことから当科にて補中益気湯7.5g分3食前を処方した。処方後約4週間で疲労感が改善傾向を示し、内服開始後8週間の時点で、これまでは抗菌薬終了後約1週間にて頻尿、不快感の再発を認めていたのが、同終了後3週間の症状の再発を認めなかった。

漢方薬の慢性膀胱炎に対する効果の報告は散見されるが、一定の見解は得られていないのが現状であると思われる。今後本症例のフォローとともに症例を増やして検討したい。